

地域資源の生成過程に関する考察 — 島根県松江市の茶の湯文化を事例として —

藤 岡 千 尋 渡 邊 一 成

要旨

近年、地域資源—とりわけ歴史的建造物や伝統文化を含む文化資源—は、幅広い分野と連携して活用することで、地域社会の持続的な発展に寄与することが期待されている。中でも茶の湯文化は、伝統技術や食文化など様々な要素を含む文化資源であり、その維持・継承の重要性は高いと考えられている。そのため茶の湯文化は、島根県松江市をはじめ、複数の自治体で活用を通じた継承が図られている。

文化資源の活用に際しては、文化庁により、現状に至る経緯や実態等を調査し、それらを踏まえることの必要性が指摘されている。そして、その調査結果を解釈する際に、E. ホブズボウムが提唱した「創られた伝統」という構築主義的な概念に立つと、伝統文化などの文化資源は、不変なものではなく、社会状況等の影響を受けながら変化していくものであると言える。

そこで本研究は、松江市の茶の湯文化を事例として、郷土資料や地元紙等の文献調査および関係者への聞き取り調査をもとに、地域資源の生成過程および地域内での位置づけの変化を明らかにすることを目的とした。

その結果、松江市における茶の湯文化は、松江藩松平家7代藩主松平不昧によってその礎が築かれ、武家の嗜み、不昧という人物の象徴、そして地域の魅力である地域資源と、時代の移り変わりとともに形を変えながら、松平家や松江市民によって脈々と受け継がれてきたことが明らかとなった。

キーワード：地域資源、創られた伝統、松江市、茶の湯文化、松平不昧

1. はじめに

近年、持続可能な都市の在り方が議論される中で、地域資源を活用した地域振興—とりわけ歴史的建造物や伝統文化を含む文化資源を活用した取り組み—が注目されており、これらの資源は、観光やまちづくり、教育や産業など幅広い分野と連携することで、地域社会の持続的な発展に寄与することが期待されている。中でも茶の湯文化¹⁾は、伝統技術や食文化など様々な要素を含む文化資源であり、これら全ての技術・技能を支えることから、その維持・継承の重要性は高いと考えられる。そのため茶の湯文化は、複数の自治体で地域資源としての活用を通

じた継承が図られており、特に島根県松江市では「松江市茶の湯条例（以下、「茶の湯条例」）」や「茶の湯の日」の制定など、茶の湯文化を積極的に地域振興に活用する様子が見られる。

このように有用性が見出されている文化資源であるが、その活用については文化庁が、現状に至る経緯や実態等を踏まえることの必要性を指摘している²⁾。ここで重要となるのが、調査結果を活用する際にどのような解釈がなされるかという点であり、ホブズボウム（1992）が提唱した「創られた伝統」という構築主義的な概念に立てば、伝統や地域文化などの文化資源の位置づけは、不変なものではなく、社会状況等の影響を受けながら変化していくもので

あり、これに伴い文化資源そのものもまた変化していくものであると言える。しかしながら、これらを踏まえて先行研究を見ると、松江市の茶の湯文化において、その変化の過程に着目した研究は管見の限り見られない。

そこで本研究は、松江市の茶の湯文化を事例として、郷土資料や地元紙等の文献調査および関係者への聞き取り調査をもとに、地域資源の生成過程および地域内での位置づけの変化を明らかにすることを目的とした。

なお、本研究において「地域資源」は、先行研究より整理・分類された三井情報開発株式会社総合研究所（2003）に倣い、「地域内に存在する資源であり、地域内の人間活動に利用可能な（あるいは利用されている）、有形、無形のあらゆる要素」として扱っている。また西山（2012）にて、「文化財」「文化遺産」「文化資源」といった言葉の整理がなされている。これに基づき本研究では「文化資源」について、「地域内に存在するあらゆる文化的資産の個別の要素」としている。特に、表1において「歴史的資源」「社会経済的資源」に該当するものを指す。

表1 地域資源の分類

固定資源	地域条件	気候的条件	降水、光、湿度、風、潮流 等
		地理的条件	地質、地勢、位置、陸水、海水 等
		人間的条件	人口の分布と構成 等
	自然資源	原生的自然資源	原生林、自然草地、自然護岸 等
		二次的自然資源	人工林、里山、農地 等
		野生生物	希少種、身近な生物 等
		鉱物資源	化石燃料、鉱物資源 等
		エネルギー資源	太陽光、風力 等
		水資源	地下水、表流水、湖沼、海洋 等
		環境総体	風景、環境の同化能力 等
	人文資源	歴史的資源	遺跡、歴史的文化財、歴史的建造物、歴史的事件、郷土出身者 等
		社会経済的資源	伝統文化、芸能、民話、祭り 等
		人工施設資源	構築物、構造物、家屋、市街地、街路、公園 等
		人的資源	労働力、技能、技術、知的資源 等
		情報資源	知恵、ノウハウ、電子情報 等
流動資源	特産的資源		農・林・水産物、同加工品、工業部品・組立製品 等
	中間生産物（付随的資源、循環資源）		間伐材、家畜糞尿、下草や落葉、産業廃棄物、一般廃棄物 等

注：「固定資源」とは、地域に固定されているもの、地域内で利活用・消費されるものを指し、「流動資源」とは、地域内で生産され、地域外でも利活用・消費されるものを指す。

出典：三井情報開発株式会社総合研究所（2003）、p.5、図 1-1 より作成。

2. 日本における茶の湯文化の成立と展開

茶の湯文化は、中国の唐の時代に栄えた餅茶を起源とし、鎌倉時代中頃に、天台宗の僧である栄西によって抹茶法が日本に持ち込まれた。これ以降、闘茶や一服一銭など多様な方法で茶の湯が楽しまれていた。

そして15世紀後半頃、精神性を重視したわび茶が、「わび茶の祖」村田珠光、「中興の祖」竹野紹鷗、そして「わび茶の大成者」千利休（以下、「利休」）により成立した。特に利休は、わずか二畳の小さな茶室や、竹製の茶道具など、「草庵の茶」一装飾を省き心の在り方を大切にすることを重視したわび茶の創出に取り組んでいた。

利休らにより成立したわび茶はその後、利休の子孫や「利休七哲」と呼ばれる主要弟子により継承された。これに伴い茶風も、利休の血脈を受け継ぐわび茶、主に武家によって担われた武家茶道など、時代に合わせて展開されていったのである。

江戸時代後半になると、茶室や茶道具など茶の湯文化の構成要素に創意を発揮していた前代とは異なる活動を展開する人物たちが現れた。特に松平不昧（以下、「不昧」）は、生涯を通じて自らの茶道観である「不昧流」を確立した。また、茶道具の保護・蒐集にも力を入れ、不昧が刊行した『古今名物類聚（以下、『同類聚』）』は、茶道具に確固たる位置づけを示し、この功績が高く評価されている。

そして明治初期、急激な欧化政策の推進により、茶の湯文化を含む旧来の文化・芸術等は一挙に衰退することとなった。このような中でも明治中期頃、ナショナリズムの台頭に伴い伝統文化が改めて注目され、茶の湯文化も、礼儀作法として再発見する動きが見られるようになったのである。また「近代数寄者」と呼ばれる政財界の茶の湯愛好家が、茶道具等を購入し、自宅や別邸の茶室にて買い込んだ茶道具の紹介を兼ねた茶会を催すなど、茶の湯文化の重要な担い手となった。さらに、女学校を中心とした学校教育への導入や、花嫁修業として茶の湯を嗜むことが必須であるような風潮により、茶道人口の女性比率が急激に上昇した。

第二次世界大戦後からは、茶道各流派による海外への支部設立や海外在住の茶道愛好者向けの研修会など、茶道の国際発信に取り組みられてきた。これにより現代では、代表的な日本の伝統文化のひとつとして海外に広く認知されるようになった。

そして近年では、地方創生や地域活性化が重要視されている背景から、茶の湯文化が地域固有の地域資源としても利活用されている。中でも、大阪府堺市の「堺茶の湯まちづくり条例」、島根県松江市の「茶の湯条例」、滋賀県彦根市の「井伊直弼公の功績を尊び茶の湯・一期一会の文化を広める条例」など、茶の湯文化の発展に資する条例を制定した自治体も見られている。

3. 今日の松江市における茶の湯文化

松江市は、山陰地方に位置する島根県の県庁所在地で、その市域は東西41km、南北31km、面積は572.99km²である。また、宍道湖・中海・堀川など多様な水域に囲まれていることから「水の都」とも称されている。そして、平成27年（2015）7月8日に国宝に指定された松江城天守や城下町などの歴史的景観、「ホーランエンヤ」や「鑿行列」「水郷祭」を含む伝統行事が受け継がれるなど、町全体で歴史的風致を形成している。

今日の松江市では、文化行政にて茶の湯文化が取り入れられており、そのひとつが茶の湯条例である。茶の湯条例は、平成30年（2018）に開催された「不昧公200年祭（以下、「200年祭」）」を契機として、官民一体となって様々な取り組みを継続し、茶の湯の文化と産業の発展につなげることを目的として制定され、平成31（2019）年4月1日より施行された。全9条で構成され、特に第8条では「基本施策」として、茶の湯文化等への理解を深めるための情報収集・発信や、将来を担う人材の確保・育成など必要な施策を講ずるとしている。そして第9条では、4月24日を「茶の湯の日」とし、市民や茶道団体、事業者などが茶の湯文化等に特に親しみ、市もまた、茶の湯の日の啓発活動を行うなど、市全体で茶の湯文化の振興に期する日としている。このように茶の湯条例

にて、市全体で茶の湯文化に親しむ機会を設けていることから、松江市では文化行政において茶の湯文化を重視していることが窺える。

茶の湯条例のほか、令和3（2021）年3月30日には「松江の文化力を生かしたまちづくり条例（以下、「まちづくり条例」）」が制定された。国際文化観光都市70周年を迎えるにあたり、松江の文化力を再認識し、誰もが心豊かになれるまちにしていこうための指針を示すことを目的としている。まちづくり条例では、基本理念として以下の「松江の文化力を支える七つの柱」を保存し継承および発展させることを掲げている。

- （1）古代から近代までの豊富な文化財
- （2）地域に根づく伝統文化
- （3）市民生活に根づく茶の湯文化
- （4）小泉八雲が五感で感じた松江の生活文化
- （5）市民とともに育む文化芸術活動
- （6）伝統文化芸術活動の拠点となる施設
- （7）宍道湖、堀川、中海等の松江の景観

この柱の中には「地域に根づく伝統文化」が位置づけられている一方で「市民生活に根づく茶の湯文化」も柱のひとつとして掲げている。茶の湯文化も、松江市に根づく伝統文化のひとつとして考えることができるが、茶の湯文化単体で柱としている点から、松江市は伝統文化の中でも茶の湯文化を重視していると言える。

そのほか、観光の側面からも茶の湯文化の位置づけを見ることができる。主な観光資源が紹介されている『令和4年度 松江市観光白書【資料編】』では、「（2）歴史的資源」にて、「城」「神社・仏閣」などにならび「茶室」という項目があり、不昧に関連した茶室である「明々庵」「菅田庵」「観月庵」の名称や概要が記載されている。このほか「その他建造物」という項目もあるが、茶室をそれには含まず、単独で項目を設定している点からも、松江市における観光資源として茶室、ひいては茶の湯文化を重視していることが窺える。

このように松江市で利活用されている茶の湯文化だが、市民の認識については『文化に関する市民アンケート調査³⁾（以下、「アンケート調査」）」より読

み取れる。

まず、市民が感じる「松江らしい文化」「松江の誇り」についての項目（図1）では、記述式で最大3つまでの回答が求められた。この中で「茶の湯」は、松江市にゆかりのある作家「小泉八雲」や「鑿行列」などを抑えて5番目に多く回答されている(73件、9.2%)。記述式であるにも関わらず、松江城や宍道湖などに次いで「松江の誇り」として茶の湯が挙げられていることから、現在の松江市において、市民の生活と茶の湯が密接に関わっていることが見受けられる。

次に、市民が現在行っている文化的な活動についてである（図2）。現在市民が行っている創作や公演、イベントなどに関する文化的な活動については、「華道、茶道、書道、盆栽などの生活文化」は51件、全体の約20%の回答を得ており、最も多い結果となっている。その年代別の内訳については、60代から80

代が全体の約4分の3を占めている（図3）。華道、茶道、書道、盆栽などの内訳は公開されていないため、茶道を親しんでいる人の正確な回答数は定かではないが、これらの結果より、茶道を含む「生活文化」が、現在でも市民によって特に親しまれていることが読み取れる。

4. 松江市における茶の湯文化の成立過程

前章にて、今日の松江市における茶の湯文化が、地域資源・観光資源として利活用されている実態が分かった。では、今日に至るまでにどのような過程を辿ってきたのか。本章では、松江市における茶の湯文化の位置づけの変化について、茶の湯文化の関連事業等から見ていく。そして、地域資源として生成されていく過程を明らかにする。なお、本章では当該地域の名称について、市制施行前を指す場合を

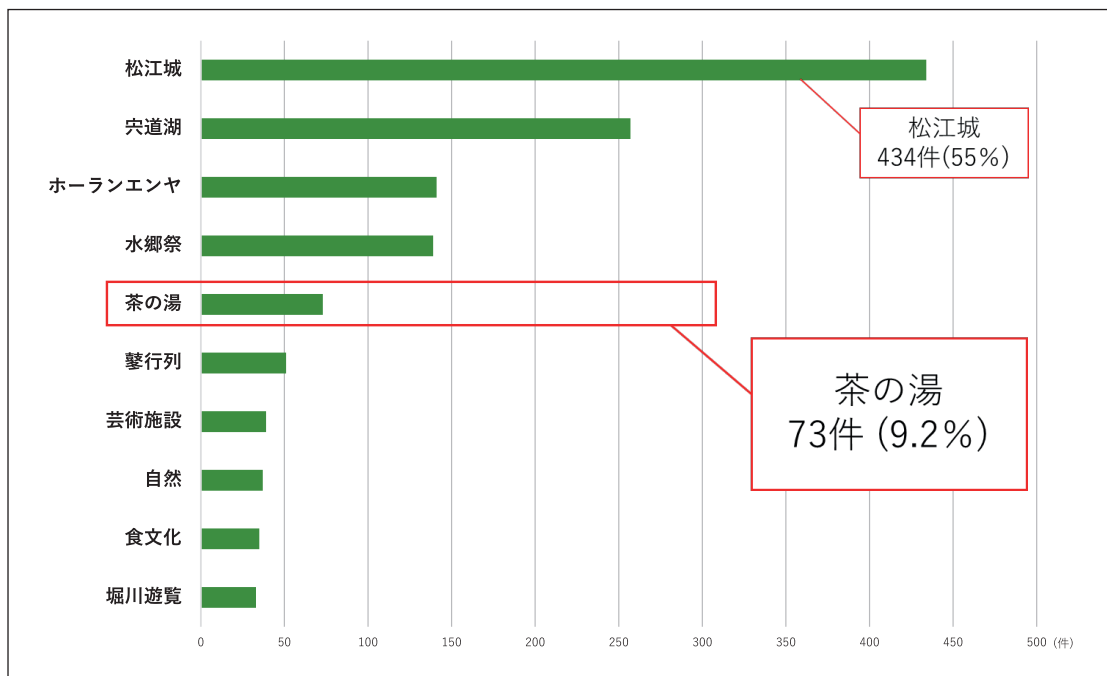


図1 松江市民が感じる「松江らしい文化」「松江の誇り」上位10件

注：全45項目、791件の回答があった。なお、記述式で回答された記載表現が様々であったため、「松江城」「松江城と塩見縄手」「松江城の景観」などを全て「松江城」とする集計方法が取られている。

出典：「文化に関する市民アンケート調査報告書」より作成。

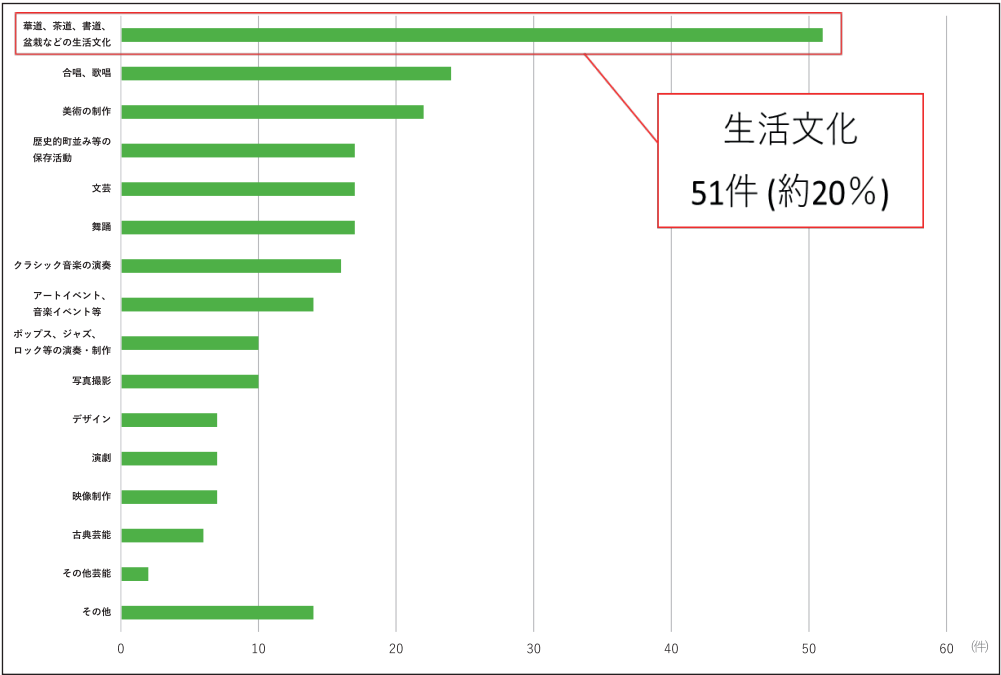


図2 現在行っている創作や公演、イベントなどに関する文化的な活動(n=241)
出典：「文化に関する市民アンケート調査報告書」より作成.

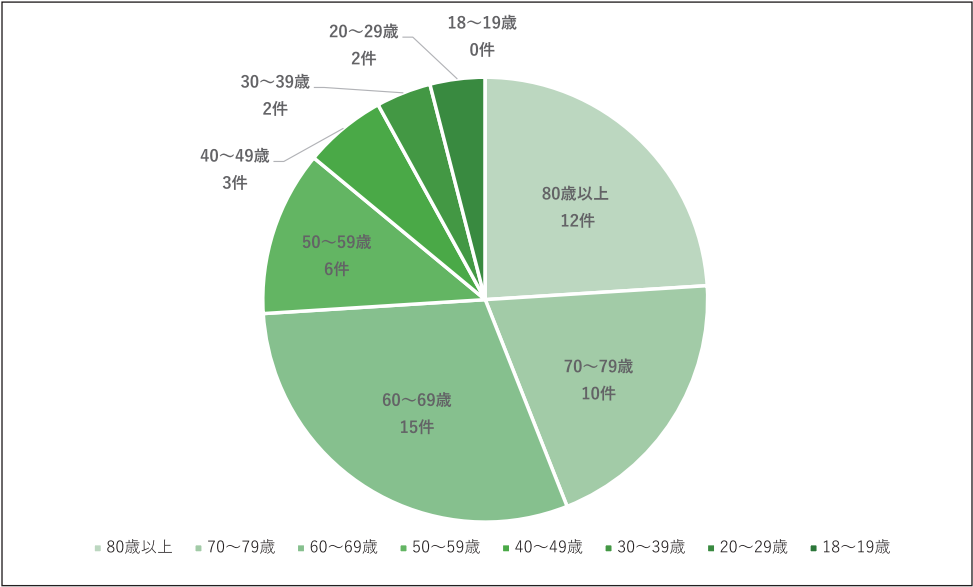


図3 華道・茶道・書道・盆栽などの生活文化活動者の年代別内訳 (n=51)

注：各年代の回答件数はアンケート調査より割り戻し四捨五入した数値であるため、総数と合計値は一致していない。
出典：「文化に関する市民アンケート調査報告書」より作成.

「松江」、明治22年（1889）の市制施行後の場合を「松江市」としている。

4-1 茶人 松平不昧と不昧流の誕生

宝暦元年（1751）、不昧は江戸赤坂の松江藩邸に生まれ、幼少期より茶道を習い、18歳で幕府の茶道師範石州流の半寸庵3代伊佐幸琢（以下、「幸琢」）に入門、明和7年（1770）11月に、幸琢より真台子の皆伝を得た。そして藩主となってからも、同年に茶論『贅言』を執筆、寛政元年（1789）から同9年（1797）にかけて「陶齋尚古老人」の名で名物茶器の図鑑『同類聚』を刊行するなど、後世にわたって称えられる茶人としての功績を残した。特に『同類聚』では、これ以前の茶道具の格付けにおいて明確な基準が示されていなかった中で、「中興名物」「大名物」などの新たな概念を取り入れ、茶道具の分類に客観的な基準を示したのである。このような内容が収められた『同類聚』は、近代からの茶道史に大きく貢献し、現代でもその影響を与え続けている。

不昧は藩主であった40年間で19回の参勤交代を行ったことでも知られ、その際に触れた江戸の茶の湯文化を松江に取り入れたとも言われている。その中のひとつが和菓子である。江戸で触れた和菓子を三津屋、面高屋など地元の御用菓子司に作らせたり、松江藩の職人を江戸に派遣して和菓子の作り方を学ばせたりするなど、いち早く菓子に着目した茶人でもあった。

そして文化3年（1806）3月、不昧は藩主の座を松平齊恒（以下、「齊恒」）に譲り、隠居することとなった。隠居した不昧は、剃髪して「不昧」の号を公称し、名器蒐集と茶の湯三昧の晩年を送った。晩年を過ごした大崎下屋敷では、「独楽庵」など趣向を凝らした11もの茶室を設け、「茶会ではみな平等である」という茶の湯の理念のもと、身分問わず様々な客を招待し茶会を開催していた。晩年の茶道観については、齊恒に宛てた遺書から読み取ることができる。石井（2018）によるとその遺書には、「…（自分は）若い時より茶を好み、茶禅一味であることをわきまえた。世に数寄者ありというが、道を心得ていない。茶を好むのみで、道は俗人の評判するもの

ではなく、禅坊主といっても、禅とは何のことか知らない者が多い…」（p.131）とあり、不昧は茶道と禅が不即不離であると認識していることが分かる。不昧は、茶道を究めながらもその本質は禅道に依拠すると考え、多くの高僧と親交を深め、生涯を通じて、茶禅一味を追求したのであった。

不昧没後の茶の湯文化についても言及しておく。松江藩は天保6年（1835）、贅沢品を禁ずるため、百姓たちが茶の湯などの遊芸の指導役を招くことや、町場で挽き茶（抹茶）を販売することを禁止した。一方で、下級武士や商人の家屋には、見た目などに工夫が凝らされた「隠れ茶室」が設けられていた。これより、不昧没後も、藩によって規制がなされるほど、百姓らにも茶の湯文化が広がっていたと言える。また明治維新を経て改めて日本固有の文化が注目された明治10年代には、有沢宗閑・宗滴がのちの「不昧流」である「雲州流」の教授に携わっていた。その功績は「明治維新により全国各地で茶道が廃頽する中で、雲州流茶道は宗閑・宗滴両宗匠の献身によりその危局を切り抜け、雲州流の今日に至っている」と評されている⁴⁾。

このように不昧が生涯を通じて追求した茶の湯文化は、不昧没後も茶人や下級武士、百姓らに親しまれ、後世に受け継がれていくのであった。

4-2 明治期における松江の茶の湯文化

松江市の茶の湯文化を構成する重要な要素のひとつに和菓子がある。前節でも言及したように、松江藩の菓子職人を江戸へ派遣し、菓子製造の技術を学ばせるなど、不昧は茶の湯そのものだけでなく、和菓子にも着目し、現在京都、金沢と並び「三大菓子どころ」とも称される松江市の和菓子文化の基礎を築いた。本節では、星野（2002）、山陰中央新報社（2018）に依拠しつつ、明治期における松江の茶の湯文化について、特に和菓子に着目し、見ていくこととする。

まず、明治17年（1884）の菓子商店数を見るとその数は122戸で、酒店、米店に次ぐ3番目の多さである（表2）。島根県全体に目を向けると菓子商店数は1,333戸であるため、そのうちの約9%が松江市街

で営業されていることが分かる。

次に、松江市制が施行された明治22年（1889）の松江市の商店数を見ると（表3）、菓子業は287店で、穀類や魚鳥獣を抑えて1番多い結果となっている。この年の島根県の菓子類商店数は1,597店であるため、松江市には全体の約18%が店を構えており、5年前よりも松江市が占める割合が増加している様子が見受けられる。店舗数を比較しても、同17年から165店の増加を見せている。菓子の内訳について詳しい記述はないため、和菓子店の状況は定かではないが、松江市にて多くの菓子商店が開業されたことが読み取れる。当時の菓子業について星野（2002）は、明治20年代に松江市の経済活動が盛んであったことを差し引いても、店舗数の増加状況より、菓子が松江市民に親しまれている様子が窺えるとしている。

明治後期になると松江市の和菓子は、市外からも評価を受けることとなる。同40年（1907）5月から6月初めにかけて、後の大正天皇となる嘉仁親王（以下、「皇太子」）による山陰行啓があり、その際購入した土産物の中に一力堂の羊羹3棹など、松江市の和菓子5点が含まれていた。これ以降、和菓子店の宣伝広告にて「皇太子殿下」「御買上」の文字が強調され

表3 島根県および松江市の商店数（明治22年）

業種	商店数(店)	
	島根県	松江市
菓子類	1,597	287
穀類	1,757	255
魚鳥獣	2,603	162
乾物青物および果物類	1,189	133
葉種および売葉	532	133
和洋酒	2,119	114
味噌、醤油、酢、塩等	1,493	69
飲食品	1,178	67
豆腐、こんにゃく	1,276	55

出典：星野（2002）、p.81、表22より一部抜粋して作成。

たり、松江名産品の懸賞募集にて皇太子が購入した和菓子が複数入賞したりするなど、皇太子が購入した和菓子が高く評価されている様子が見られた。また、同41年（1908）11月8日、米子・松江間の鉄道が開通したことにより、和菓子の販路が周辺地域や京阪神地方へと拡大された。

明治40年代は日本全体の菓子業の発展が顕著に見られ、松江市でも同40年（1907）に、菓子業の営業改善および発達を目的として「松江市菓子商同業組合」が結成された。また同時期に、不味好みの名菓の数々も人々の中で話題となり、風流堂の「山川」と彩雲堂の「若草」が復活した。このような日本の菓子業界を取り巻く社会的背景や皇太子の行啓、山陰への鉄道の開通による販路拡大など、明治期の松江市を取り囲む事象の数々は、今日、「日本三大菓子どころ」としても知られる松江市のイメージが形成されるきっかけになったと言える。

ここまで、明治期における松江市の和菓子の動向に着目してきたが、これに加えて明治後期は、日本各地の歴史都市において、古都や旧藩に由来した都市イメージの形成が盛んに行われていた時代でもある⁵⁾。松江市でも、明治43年（1910）5月に举行された「松江開府300年祭」を契機として、旧藩の歴史を都市イメージの形成に利活用している様子が見られる。当時の地元紙でも、松江城を築城した堀尾吉春を含む堀尾家や親藩である松平家の歴史を有する地として床几公園（現在の床几山公園）を観光資源とするとともに、公費での公園整備が必要である

表2 島根県および松江市街の商人営業区別表

単位：戸

項目	島根県	松江市街	項目	島根県	松江市街
油	512	67	芋	61	4
砂糖	55	12	焼酎	3	2
葉種	85	25	醤油	490	64
挽粉	13	3	味噌	5	3
菓子	1,333	122	飴	21	4
茶	41	11	牛肉	15	2
酒	651	406	豆腐	179	8
乾物	11	4	こんにゃく	12	2
酢	148	10	牛乳	12	3
魚鳥	1,875	91	塩	134	6
果物	426	22	雑穀	72	56
麴	240	19	饅頭	6	0
干うどん	45	3	その他	5,055	841
米穀	1,201	269	合計	12,701	2,059

注：松江市制施行(明治22年)以前の統計データため、「松江市街」として把握されている。
出典：星野（2002）、p.57、表8より作成。

ことが指摘されている。これより明治後期には、松江市の歴史が観光資源として利活用されていた様子が見受けられる。

4-3 不昧公100年忌

大正5年（1916）から同6年（1917）にかけて行われたのが「不昧公100年忌（以下、「100年忌」）」である。100年忌は、同4年に執り行われた大正御大典にて、不昧に「従三位」が追贈されたことを受け、松平家主催のもと開催された。100年忌とともに開催された「不昧公100年忌記念大茶会（以下、「100年忌大茶会」）」には、会場となった松平伯爵邸の「明々庵」がある東京のほか、京都、大阪、名古屋、金沢、出雲など遠方からも関係者や好事家が招待され、不昧好みの装飾や茶道具が多数用いられた。また、出雲そばが振る舞われたり、記念品として楽山焼の徳利盃が招待客に頒布されたりするなど、出雲地域の物産も随所に見られた。

100年忌の記念事業として、ここでは特に『松平不昧伝（以下、『不昧伝』）』の編纂に注目したい。『不昧伝』の編纂は、当時の当主松平直亮（以下、「直亮」）の命を受けて、旧松江藩出身の国文学者高橋龍雄を代表とする松平家編輯部によって行われた。上巻241頁、中巻244頁、下巻209頁に及ぶ大書で、いかに不昧が優れた人物であったかが述べられている。そこで、田中（2020）および当時の地元紙に依拠しつつ、『不昧伝』の編纂過程を見ていくこととする。編纂過程について田中（2020）は、2つの時期に分けられるという見方を示している。第1期は明治30年代後半から大正2年（1913）初めまでであり、第2期は同2年から刊行に至る同6年（1917）4月までとしている。

第1期では、先述の期間の中でも特に明治40年代に編纂が進められたと推測されている。この時期に編纂を委嘱されたのは、松江出身の文学博士三浦周行（以下、「三浦」）である。第1期において重視されていたのは、不昧の藩主としての事蹟であった。松江藩松平家初代藩主である松平直政について書かれた『松平高真公傳』や10代藩主松平定安の伝記『松平定安公伝』も藩主の事蹟を中心とした内容であっ

たため、これらと同様に、藩主としての事蹟を編纂するという方針で進められていたと考えられる⁶⁾。三浦が編纂を担当していた時期には、明治43年（1910）完成の見込みが示されていたが、この時点では刊行に至らなかった。

その後の編纂は、大正2年から再開され、刊行に至る同6年4月まで行われた。第1期では主に不昧の藩主としての功績がまとめられていたのに対し、第2期では付録に100年忌大茶会の内容を加えるなど、不昧と茶の湯の関わりを印象付ける内容となっていた。この時期の編纂の中心人物となったのが、高橋義雄（以下、「箒庵⁷⁾」）である。箒庵は『不昧伝』編纂以前の明治45年（1912）2月より『時事新報』にて「東都茶会記」を連載しており、不昧の著書『贅言』や『茶礎』、不昧愛蔵の茶道具や茶室など、不昧に関連する内容も多数記載していた。田中（2020）は、この連載に際して不昧の調査を入念に行った箒庵が不昧への関心を高め、その姿を見た直亮もまた、不昧の顕彰には茶の湯が効果的であると認識した可能性があると考えしている（p.23）。これより『不昧伝』の編纂方針が、不昧の藩主としての功績から茶人としての功績に変化したのは、箒庵の影響が大きいと言える。箒庵が中心となり編纂された『不昧伝』は、全4篇で構成されており、うち第3篇は全体を通して茶道について記載されている。また第4篇でも学問や芸術について述べられており、不昧の茶人・文化人としての功績を高く評価している様子が多分に見られる（表4）。

『不昧伝』刊行後も、関連書籍の出版や演劇の上演、不昧を追慕し、不昧の茶の湯を発揚することを目的とした「一々会」の設立など、大名茶人としての不昧を一層定着させる動きが多数見られていた⁸⁾。特に「一々会」は、設立目的に則り不昧の命日である4月24日に「菅田庵」および「向月亭」に集まって不昧を偲び、不昧の茶の湯を楽しんだ。

ここまで見てきたように、大正御大典にて不昧が追贈されたことがきっかけとなり、100年忌および100年忌大茶会が執り行われた。これを契機として不昧が顕彰されはじめ、『不昧伝』編纂を皮切りに、不昧に大名茶人という印象を定着させる動きの数々

表 4 『松平不昧伝』と『松平定安公伝』の目次比較表

松平不昧伝	松平定安公伝
第一篇	第一章 少年時代
第一章 幼時	其一 出生及入家付文武兼修
第二章 父天隆院	第二章 青年時代
第三章 元服及襲封	其一 襲封と改名
第四章 治世、退隱、逝去、贈位	其二 入國参府と修養
第二篇	其三 國防嚴修と武技奨励
第一章 人才登用	其四 武州本牧の警護
第二章 國內の巡視	其五 禁裡造營の公役
第三章 儉約令	其六 大坂警衛と陞任
第四章 神門郡の防沙工事	其七 京都守衛と勤勞
第五章 出雲大川の治水工事	其八 修養及世子確立
第六章 佐陀川の開鑿	其九 各地守衛内容一斑
第七章 殖産工藝	第三章 中年時代
第八章 雲國の豊饒	(上) 國防嚴修と兩都警衛の努力
第九章 皇室との關係	(中) 勤王一途の活動
第十章 幕府の公役	(下) 一藩難局の打開
第十一章 武術奨励	第四章 晩年時代
第三篇 茶道	(上) 東都奉仕と郷國統治
第一章 總説	(中) 退隱及同期間の奉公
第二章 傳統	(下) 再相統及晩年の奉仕
第三章 不昧流	付録
第四章 門人	詞藻（和歌及漢詩）
第五章 贅語及茶礎	神仏崇敬と社寺の保護
第六章 大崎庭園	安定公略年譜
第七章 孤篷庵	
第八章 茶友録	
第九章 好み	
第十章 懷石	
第十一章 著述	
第十二章 美術の保護	
第四篇	
第一章 禪學	
第二章 儒學	
第三章 書道	
第四章 文藝	
第五章 家庭	
第六章 逸事	
付録	
不昧公百年忌記念大茶会記	

出典：『松平不昧伝』『松平定安公伝』より作成.

が見られた。これらより、当時の松江市では茶の湯文化は、不昧顕彰の象徴として位置づけられていたことが見て取れる。

4-4 不昧公150年祭

昭和41年（1966）10月には、不昧の150年忌を迎えたことを記念して、「不昧公150年祭（以下、「150年祭）」が開催された。記念事業として開かれた「不昧公150年祭記念大茶会（以下、「150年祭大茶会）」では、「不昧流」での献茶が行われ、茶席では不昧ゆかりの菓子が提供されるなど、不昧が築いた茶の湯文化を感じられる内容であった。

これらの記念事業において主催者に着目すると、100年忌の主催者は松平家個人であったのに対し、150年祭は島根県や松江市などの地方公共団体が主催している。参会者を見ても100年忌は松平家に招待された人物であったのに対し、150年祭は地方公共団体の主催事業として不特定多数の人々が参加可能となった。この点から、島根県や松江市にて、不昧を地域の象徴的な人物とする意味合いが強まったことが推察される。

また150年祭は、新聞やラジオ、テレビでの特集記事や特別番組の企画、関係出版物の刊行、記録映画の製作など、各メディアでも大々的に取り上げられた。その内容を見ると、やはり藩主ではなく茶人としての不昧や、不昧が礎を築いた「不昧流」などに焦点を当てたものが多く見られる。150年祭開催直前の地元紙に掲載された有識者の座談会でも「150年祭は、郷土の為政者としての功績ではなく、『茶人としての不昧』『優れた文化人としての不昧』を偲ぶという建前」という発言があった⁹⁾。各種メディアの取り上げ内容や有識者の発言より、150年祭においても、茶人である不昧が顕彰されていたことが見て取れる。また、150年祭大茶会においては、「献茶は不昧流」「不昧ゆかりの和菓子を提供」など、不昧より始まった茶の湯文化を重視しており、この時期の松江市で茶の湯文化は、100年忌と同様に、不昧顕彰の象徴として位置づけられていることが分かる。

ここからは、150年祭以降の茶の湯文化に関連す

る動きについて、不昧ゆかりの茶室「明々庵」に着目して見ていくこととする。150年祭の記念事業として再建された「明々庵」は、昭和41年10月11日に一般公開が開始された。そして同42年（1967）には、「明々庵」を管理する松江博物館の事業計画にて、『明々庵』の利用を広く宣伝し、観覧と利用の拡大を図るため、パンフレットの製作や定期観光バスの乗り入れを実施すること」「受け入れ体制を強化するため、石段の改修等を行うこと」が明記された¹⁰⁾。これを受けて、同年4月1日以降に「明々庵」入口の石段の全面修理が行われ、翌43年（1968）5月15日より定期観光バスの乗り入れが開始された。

前述したように、明治期において、松江市では既に旧藩の歴史や床几山周辺を観光資源とする動きが見られていた。また、昭和初期の松江市は、当時の市長石倉俊寛のもと、観光都市化に力を入れていた。松江観光協会（以下、「観光協会」）が結成され、各種交通機関を組み合わせた周遊ルートが考案されたのである。さらに同時期、宍道湖や記紀神話に係る神社以外の観光資源を発掘する動きも見られ、観光協会が発行した観光リーフレット『出雲部の観光路』では、推奨ルートに不昧ゆかりの茶室である「菅田庵」も組み込まれた。

「明々庵」もまた、今日の松江市において不昧ゆかりの重要な観光資源となっている。昭和43年より導入された定期観光バスの運行範囲を確認できる資料は管見の限り見られない。だが、松江博物館の事業計画および「明々庵」に乗り入れる定期観光バスの運行実現や、それと同時期に行われた「明々庵」入口の石段改修および、昭和初期の周遊ルートに組み込まれた「菅田庵」から、当時の松江市において、茶室、ひいては茶の湯文化が観光資源として活用されていた一端が見られることを指摘しておきたい。

4-5 第21回全国菓子大博覧会（松江市制100周年事業）

平成元年（1989）、松江市は市制100周年を迎え、その記念事業のメインイベントとして開催されたのが「第21回全国菓子大博覧会（以下、「松江菓子博」）」である。松江菓子博は、平成元年4月23日か

ら5月14日までの22日間にわたって開催され、菓子博の歴史で初めての官民共催としても注目を集めた。

松江菓子博では、全国から出展された菓子の販売や工芸菓子の展示のほか、お茶会の開催や、菓子の審査会における「茶道家元賞」の新設など、茶どころ・松江市ならではの内容も見られた。また協賛・特別催事（表5）でも、不昧や松江市の茶の湯文化に関連したものが多数開催され、和菓子のみならず、広く茶の湯文化をPRする機会となっていたことが窺える。

松江菓子博は、来場者の共感を得ることを目的に菓子博において初めてテーマが設定された。また、「創る」「遊ぶ」「学ぶ」「食べる」「見る」「聞く」「触れる」などの体験を通して人々に感動を提供する博覧会を目指していたことが基本方針に記載されている。そして、先に述べたように松江菓子博は初の官民共催の菓子博でもあり、松江市制100周年の記念事業でもあった。加えて松江菓子博以降、全国紙等のメディアにて松江市と茶の湯文化のつながりが報じられるようになり、京都・金沢とならぶ「三大茶どころ・菓子どころ」と称されるようにもなった¹¹⁾。これらより、松江菓子博では市民や来場者に対し、松江市の茶の湯文化に親しんでもらうとともに、茶の湯文

化や和菓子を「地域の魅力」として捉え、対外的な発信をより強化する契機となったことが推察された。

4-6 不昧公200年祭

平成30年（2018）には、不昧没後200年を迎え、記念事業として200年祭が開催された。松江菓子博と同様に、200年祭もまた、行政と民間団体が連携しての実施となった。

200年祭では、不昧の美意識を感じられる企画展や茶会が多数催され、200年祭を記念したメニューや和菓子の提供も松江市内の飲食店や和菓子店によって行われた。また、「茶の湯堀川遊覧船」の運行が開始されるなど、松江市の茶の湯文化を大いに堪能できる内容であった。

不昧の没後200年は、200年祭開催期間中、メディアでも多数取り上げられ、特に地元紙『山陰中央新報』では、不昧の名声が高まった背景や「不昧流」、不昧が愛した茶器や茶室、和菓子や食文化など、不昧を主軸とした内容が連載された。また、200年祭でのプロモーションは、島根県の広告文化・技術の向上と地域振興を図ることを目的に開催された「第43回島根広告賞¹²⁾」において、最高栄誉である「島根広告大賞」と「消費者特別賞」の2つの賞を受賞しており、地域内外から注目度の高さが見て取れる。

200年祭開催後も、松江市では茶の湯文化に関する継続的な取り組みの様子が見られる。松江市では、200年祭を契機として茶の湯条例が制定された（表6）。平成30年（2018）6月定例会にて、当時の松江市議会議員より、200年祭を契機とした茶の湯文化の振興について、継続して取り組むための土台となる条例の制定に関する提案があった¹³⁾。これを受け、200年祭の実施と並行して作成され、同31年（2019）4月1日より制定された。また、茶の湯条例の後に制定された「松江の文化力を生かしたまちづくり条例」（令和3年（2021）3月30日制定）および「松江市伝統文化芸術振興計画第1期実施計画」（令和5年度版）では、保存し継承・発展させるべき「松江の文化力を支える七つの柱」（第3章にて掲載）を制定しており、その中のひとつにも「市民生活に根づく茶の湯文化」として茶の湯文化を取り入

表5 「松江菓子博」協賛・特別催事一覧

名称	日時・場所	備考
出雲の茶と菓子の 道具展	4月20日～5月31日 城山公園松江郷土館	出雲焼、楽山焼などの郷土作品による茶・菓子の道具と地元ゆかりのある掛物など100点を展示
茶の湯の菓子器展	4月22日～5月28日 田部美術館	室町、桃山時代から近・現代の菓子器80点を展示
不昧公顕彰・出雲の美術名品展	4月23日～5月14日 島根県立博物館	不昧公蒐集の名品ほか200点を展示
献茶会	4月24日 午前10時 松江神社(城山公園内)	主催：不昧流不昧会
茶道文化についての講演	4月26日 午後2時～午後3時 プラバホール	講師：千宗室 (裏千家家元)
松江城大茶会	4月29日～4月30日 二の丸広場 (松江城山公園内)	主催：山陰中央新報社 茶席：10の流派が1席ずつ運営

出典：「菓子博の協賛・特別催事ご紹介 道具・器展や大茶会も」『山陰中央新報』（平成元（1989）年4月23日、23面）より作成。

れている。

そしてこれらの条例のもと、松江市では現在、茶の湯文化振興事業（以下、「茶の湯事業」）が推進されている（表7）。これらは、小中学生を対象としたものから、その保護者や家族を巻き込む狙いのあるもの、年代問わず誰でも参加可能なものまで幅広く行われており、多様な人々を対象としている。中でも「茶の湯の日イベント」は、松江菓子協会主催のもと、松江市や地域の商業施設が協力しており、松江菓子博や200年祭から引き続いて、官民一体となって地域の魅力を発信している様子が窺える。また、イベント参加者数も増加傾向にあり、令和4年度

表 6 「松江市茶の湯条例」の概要

	項目	内容
第1条	目的	基本理念を定め、市などの役割を明らかにし、基本施策を定め、市民の文化的で豊かな生活の実現に寄与する
第2条	定義	茶の湯文化、市民、茶道団体、事業者
第3条	基本理念	茶の湯文化振興にあたり相互に連携すること、生活文化としての発展的な継承を推進すること等
第4条	市民の役割	茶の湯文化等への理解を深め、振興に協力すること等
第5条	茶道団体の役割	茶の湯文化等に親しむ機会を提供すること等
第6条	事業者の役割	茶の湯文化等を担う人材育成、技術継承、新商品開発・消費の拡大に努めること等
第7条	市の役割	基本施策を総合的かつ計画的に実施すること等
第8条	基本施策	将来を担う人材の確保及び育成、教育及び学習の機会の提供、観光宣伝活動の推進、有形・無形文化財の保存及び活用のための調査・修復等
第9条	茶の湯の日	4月24日を「茶の湯の日」とし、市は普及啓発、広報、行事等必要な事業を行う等

出典：「松江市茶の湯条例」より作成。

表 7 茶の湯文化振興事業の主な取り組み

名称	内容	主催	実施時期・場所等
茶の湯の日イベント	子供向け和菓子教室 茶の湯の日関連クイズ ラリー 和菓子の福袋 等	松江菓子協会 協力：松江市 など	毎年4月、10月 イオン松江
松江藩 ちゃのゆの 学校	茶道教室を開講茶道各 流派の指導者が出向き	松江市 文化振興課	1～1時間半 松江市内 (要望があればどこでも)
食文化 シンポジウム	テーマ：「そば」 講演：「松江の蕎麦文 化について」 講師：岡宏三氏そばの 試食	松江郷土料理 研究会	令和5年3月5日(日) 14：00～16：00 島根県民会館 3階大会議室
学校給食	学校給食に茶の湯を取り 入れたメニューを提供	松江市から 市内の給食セ ンターへ依頼	4月24日（付近） 市内の全保育園・ 幼稚園・小・中学校
「職人商店街」 の補助事業	施設整備 (店舗の改修・備品購入) 広告宣伝活動 (ウェブサイト・チラシの 作成)	松江市 産業経済部 商工企画課	—

出典：聞き取り調査より作成。

表 8 「茶の湯の日イベント」の参加者数

年度	令和元	令和2	令和3	令和4
参加者数(人)	548	626	1,059	1,567

注：参加者数は4月開催時と10月開催時の合計人数である。

出典：松江市提供資料。

では茶の湯条例制定直後の令和元年度から約3倍の増加が見られる（表8）。そのほかの取り組みについても、新型コロナウイルスの影響により一時的な縮小が見られたものの、行動制限の緩和とともに再び注目を集めており、茶の湯事業の一定の成果が見られる。

また令和5年度より、茶の湯事業が観光文化課から文化振興課へ引き継がれた。これによる事業内容の変化はないが、観光文化課では観光の側面が強かった茶の湯事業が文化振興課の担当に移ったことで、「観光客を集めるための文化」から「市民に知ってもらい、引き継いでもらう文化」という意味合いに変化している¹⁴⁾。

以上より、200年祭およびそれ以降、松江市においての茶の湯文化は、地域に受け継がれる伝統文化であり、市民とともに発展させていく地域資源としての意味合いがより強まり、積極的にその利活用が図られている様子が窺えた。

5. おわりに

近年、持続可能な都市の在り方が議論される中で、地域資源—とりわけ歴史的建造物や伝統文化を含む文化資源—を利活用した地域振興が注目されており、これらの資源は、観光やまちづくり、教育や産業など幅広い分野と連携することで、地域社会の持続的な発展に寄与することが期待されている。中でも茶の湯文化は、伝統技術や食文化など様々な要素を含む文化資源であり、その維持・継承の重要性は高いと考えられている。そのため茶の湯文化は、複数の自治体で地域資源としての利活用を通じた継承が図られており、特に島根県松江市では茶の湯条例や「茶の湯の日」の制定など、茶の湯文化を積極的に利活用する様子が見られている。

文化資源の利活用に際しては、文化庁により、現状に至る経緯や実態等を調査し、それらを踏まえる

ことの必要性が指摘されている。ここで重要となるのが、調査結果を利活用する際に、どのような解釈がなされるかという点であり、ホブズボウムが提唱した「創られた伝統」という構築主義的な概念に立つと、伝統文化などの文化資源の位置づけは不変なものではなく、社会状況等の影響を受けながら変化していくものであり、これに伴い文化資源そのものも変容しうると考えられる。

そこで本研究では、文献調査や聞き取り調査をもとに、不味や茶の湯文化が松江市の地域資源として位置づけられていく過程を、行政や民間団体の動向を手がかりに見てきた(図4)。

これにより松江市の茶の湯文化は、松江藩主であった不味によってその礎が築かれ、不味没後は、100年忌や150年祭などにおいて、不味顕彰の象徴として位置づけられていたことが確認できた。また、昭和初期以降、松江市が観光都市化に注力し始めると、これに伴い、茶の湯文化も観光資源として利活用される様子が見られるようになった。そして現在では、地域資源としての意味合いが強まっていることが推察された。本研究は、地域資源そのものが、社会状況等様々な影響を受けながら地域内で生成されている可能性を示唆するものではないかと考える。

しかしながら、松江市における地域資源としての定着度や各地区での違い、ならびに、地域資源の生成過程の一般性については、さらなる研究の余地があると考えられる。そのため、継続的な調査と事例

研究の蓄積を今後の課題としたい。

【謝辞】

本研究に際し、福山市立大学大学院都市経営学研究科の諸先生方にご指導いただきました。また、本研究の調査にあたり、松江市文化振興課の職員の皆様、株式会社彩雲堂の山口周平社長、株式会社山口商店の山口章社長に多大なるご協力を賜りました。ここに記して、心より感謝申し上げます。

注

- 1) 新村編(2018)では、「茶道(さどう・ちゃどう)」は「茶の湯によって精神を修養し、交際礼法を究める道」とされており、「茶の湯(ちゃのゆ)」は「客を招いて抹茶を点て、会席の饗応などをすること、また、その作法」とされている。また、松江市(2019)では、「茶の湯文化」を「茶道、茶道に関する工芸、芸術、料理、菓子及び建造物その他の文化的所産並びにこれに関する活動により形成された技術、風俗慣習及び生活様式」と定義している。本研究ではこれらに倣い、「茶道」「茶の湯」「茶の湯文化」という言葉を意図的に使い分けている。
- 2) 文化庁「伝統文化を活かした地域おこしに向けて(概要)」より。

江戸時代後期	明治期	大正期	昭和期	平成前期	現在
<p>松平不味により礎が築かれる</p> <p>茶道具の保護・蒐集 和菓子職人の養成 『古今名物類聚』刊行</p>	<p>市民に親しまれる 和菓子</p> <p>菓子業店舗数の増加</p> <p>松江市外へ発信</p> <p>▶皇太子行啓時に購入された菓子の宣伝 ▶鉄道開通による周辺地域への販路の拡大</p>	<p>不味顕彰の象徴</p> <p>不味公100年忌</p> <p>主催:松平家 『松平不味伝』刊行</p> <p>▶「大名茶人 不味」の印象付け ▶「不味の象徴」としての茶の湯文化</p>	<p>不味顕彰の象徴</p> <p>不味公150年祭 主催:島根県、松江市</p> <p>▶「地域の象徴的な人物」としての不味 ▶「不味の象徴」としての茶の湯文化</p> <p>観光資源としての茶の湯文化</p> <p>「明々庵」の再建</p> <p>▶一般公開 ▶定期観光バスの乗り入れなど</p>	<p>「地域の魅力」</p> <p>第21回 全国菓子大博覧会</p> <p>市民・来場者の共感を得ることを重視 菓子博初の官民連携</p> <p>▶市民の愛着形成 ▶市外への発信をより強化</p>	<p>市民とともに発展させていくべき 地域資源</p> <p>不味公200年祭</p> <p>▶「松江市茶の湯条例」 ▶茶の湯文化振興事業など</p> <p>「観光客を集めるための文化」から 「市民に知ってもらい引き継いでもらう文化」へ</p>

図4 松江市における茶の湯文化の生成過程

- 3) アンケート調査は、まちづくりや観光などの資源となり得る松江市の歴史・伝統・文化に対する市民の意識やニーズを把握することを目的として行われたものである。実施方法は、令和2年4月8日から4月24日までを期間とした郵送アンケートで、無作為に抽出された18歳以上の市民2,700人（男性：1,279人 女性：1,421人）が対象となった。うち、有効回答数は791通、有効回答率は29.3%であった。
- 4) 安部（1980）、p.89より。
- 5) 高木（2005）によると、明治期は、東京開市300年祭（1889年）、平安遷都1100年祭（1895年）、加藤清正公300年祭（1909年）など、各地で藩の祖先の顕彰や地域の歴史を回顧するイベントが、地域の固有の文化を主張するかたちで挙行されていた。
- 6) 田中（2020）p.20より。
- 7) 茶人としては「高橋箒庵（たかはしそうあん）」の名で知られていたため、本研究では「箒庵」と表記する。
- 8) 大正6年には、不昧が大名茶人として注目を集めるきっかけとなる舞台『不昧公新狂言』が帝国劇場にて上演された。これは、箒庵により企画演出されたものである。また、劇場内に設けられた茶席「有樂庵」では、呈茶接待も行われた。そのほかにも、東京三越呉服店では、不昧の『百年忌大覧会』が開催され、全国各地から不昧ゆかりの道具類が多数出品公開されるなど、不昧と茶の湯文化の結びつきを一層印象づける動きが多数見られた。
- 9) 「不昧公百五十年祭によせて」『島根新聞』昭和41（1966）年9月4日、10面より。
- 10) 松江博物館（1988）より。
- 11) 工藤（2019）より、p.17より。
- 12) 「島根広告賞」は、平成31年度から山陰両県が対象となり、名称を「山陰広告賞」に変更して開催されている。
- 13) 「松江市平成30年第2回6月定例会06月19日—3号」に基づき記載。
- 14) 松江市文化振興課への聞き取り調査より。

参考文献

- 安部鶴造（1980）『不昧公と茶の湯（改訂版）』松江今井書店。
- 石井悠（2018）『お茶の殿様 松平不昧公—不昧の歩んだ道と伝えられた文化遺産—』ハーベスト出版。
- E. ホブズボウム, T. レンジャー編 前川啓治, 梶原景昭ほか訳（1992）『創られた伝統』紀伊國屋書店。
- 工藤泰子（2019）「松江観光における茶文化—第21回全国菓子大博覧会との関係から」『日本国際観光学会自由論集』3：15-19。
- 山陰中央新報社（2018）『今に生きる不昧 ～没後200年記念～』山陰中央新報社。
- シーズ総合政策研究所（2020）『文化に関する市民アンケート調査報告書』シーズ総合政策研究所。
- 新村出編（2018）『広辞苑 第七版』岩波書店。
- 高木博志（2005）「記念祭の時代—旧藩と古都の顕彰—」佐々木克編『明治維新期の政治文化』思文閣出版：303-344。
- 田中暢子（2020）「『松平不昧傳』の基礎的研究」『茶の湯文化学』34：17-43。
- 西山徳明（2012）「文化資源からはじまる歴史文化まちづくり」『季刊まちづくり35』学芸出版社：4-16。
- 文化庁「伝統文化を活かした地域おこしに向けて（概要）」
https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkazai/hokoku/chiikiokoshi_gaiyo.html（最終閲覧：2024年3月25日）
- 星野春雄（2002）『松江市菓子業の軌跡—松江市、島根県経済の変遷—』松江今井書店。
- 松江市（2019）『松江市茶の湯条例』松江市。
- 松江市（2021）『松江の文化力を生かしたまちづくり条例』松江市。
- 松江市観光部観光振興課（2023）『令和4年度版 松江市観光白書【資料編】』松江市観光部観光振興課。
- 松江博物館（1988）『明々庵の歩みく再建二十年の記録』松江博物館。

松平家編集部 (1999) 『不昧公生誕二百五十年記念
増補復刊 松平不昧傳』 原書房.

三井情報開発株式会社総合研究所編 (2003) 『いちか
から見直そう！地域資源—資源の付加価値を高
める地域づくり—』 ぎょうせい.

A Study of the Formation Process of Regional Resources

—A case study of the tea ceremony culture of Matsue City, Shimane Prefecture—

Chihiro FUJIOKA, Kazunari WATANABE

Abstract

In recent years, local resources, especially cultural resources including historical buildings and traditional culture, are expected to contribute to the sustainable development of local communities. In particular, the tea ceremony culture has been passed down through utilization in several municipalities, including Matsue City in Shimane Prefecture.

Utilization of Cultural Resources, Agency for Cultural Affairs points out that the necessity to investigate their backgrounds and current conditions when utilizing them. In interpreting the results of the survey, based on the constructivist concept of "the invention of tradition" proposed by Hobsbawm, E. J. (1992), it can be said that cultural resources such as traditions cultures change under the influence of social conditions.

That is why, this study aims to clarify the formation process of regional resources and the changes in their position within the region, using the tea ceremony culture of Matsue City, Shimane Prefecture as an example. This study based on a literature review of local materials, local newspapers and interviews with the people concerned.

As a result, it has clarified that the tea ceremony culture in Matsue City has been passed down continuously by the Matsudaira family and the citizens of Matsue, changing its form with the changing times.

Keywords : regional resources, the invention of tradition, Matsue City, tea ceremony culture, Fumai Matsudaira

DOI : 10.15096 / UrbanManagement.1706